

高等学校における選択制体育授業に対する運動部加入者の意識と経験

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 清水, 紀宏, 作野, 誠一 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/680

高等学校における選択制体育授業に対する 運動部加入者の意識と経験

——運動部活動との比較を中心として——

清水 紀宏・作野 誠一*

An Actual Conditions of The Elective Physical Education Class of Sports Club Members in Senior High School

——Comparative Analysis Between Elective Class and Club Activity——

Norihiro SHIMIZU and Seiichi SAKUNO

I 緒言

平成8（1996）年の中教審第一次答申では、「ゆとり」のなかで子どもたちに「生きる力」を育むことをねらいとして、学校の教育内容の「厳選」が提言された。このなかで、体育科における選択制授業との関連で注目されるのが「教育内容の厳選の視点」に関する部分である。この厳選の視点は、①単なる知識の詰め込みに陥りがちな内容の厳選、②重複する内容の厳選という2点に要約されるが、このうち後者については、学校間・学校段階間での重複、教科と特別活動等との重複、学校外活動との重複などを例示し、今後はこうした重複を避け、内容の整理統合を通じて厳選を図ることが求められている。

選択制体育授業（以下「選択制」と略す）は生徒の興味・関心あるいは適性・能力に応じて運動を選択し、自ら選択した運動を主体的に学習することで得意なスポーツや好きなスポーツの楽しさをより深く味わうことをねらいとする授業である。しかしこうした特徴は一見すると学校体育のもう一つの領域である運動部活動（以下「部活動」と略す）と重複しているように思われる。岡出⁷⁾は選択制体育授業とクラブ活動や部活動との違いが見えないままに放置されていることを指摘をしているが、そうした状

況は現在もほとんど変わっていない。また高橋¹⁰⁾は運動クラブと体育授業の違いや生徒の興味・関心を越えた体育独自の教科内容の存在等について明確な論理と方策が提示できなければ、体育を必修として学習させる根拠が失われることにもなりかねないと述べている。さらに平成9（1997）年の保体審答申では、運動部活動の基本的課題の一つとして教科体育との関係を整理することが提言された。このように、教科体育は部活動や学校行事、さらには地域社会におけるスポーツ活動との関係のなかで、あらためて教科としての独自性を問われているのである。

新指導要領では高等学校の選択制を拡大する方向性が示されているが、今後の教科体育において重要な位置を占めることになる選択制の意義についてもあらためて検討が必要になることはいうまでもない。このような流れのなかで、今後の選択制を意味ある授業として、またより効果的な学習形態として定着させるには、現在行われている選択制の実態をさまざまな角度から捉えた基礎的資料の蓄積が必要になると考える。選択制の実施にあたっては、施設や学校の実態（教員数、単位数、学習集団数など）、そして生徒の実態（自己学習能力の段階、興味・関心、先行経験、能力）に応じた形態や指導方法の検討が大切になるといわれるが（常木¹²⁾、

先行研究も概ねこうした問題意識の延長線上にあるとみてよいだろう。例えば、学校の実態については、選択制に必要とされる施設量(宇土ほか¹³⁾、選択制システムの導入をめぐる問題点(松田ほか⁴⁾、永田⁶⁾、選択制カリキュラムの現状と課題(松永⁵⁾)といった基礎条件の整備に関わる研究が数多く報告されている。一方、生徒の実態については、選択制授業に対する態度パターンからみた生徒の類型化(畑・山本²⁾、生徒の到達状況と先行経験からみた選択制の可能性(齋藤ほか⁸⁾、選択制授業における運動満足の内容からみた生徒の類型化(山下ほか¹⁴⁾)といった研究が報告されている。これらは、選択制授業をめぐる生徒のレディネスやある種の心理変数を手がかりにその実態を探ろうとするものである。しかし、齋藤ら⁸⁾が指摘するように、選択制体育授業のあり方を考えるにあたっては授業以外の生徒のスポーツ活動との関連にも目を向けねばならない。部活動との比較を念頭に置きながら選択制の独自性を明らかにすることは、新しい指導要領のもとで展開される授業のあり方を考えるうえで貴重な示唆をもたらすことになるだろう。しかし、生徒の実態についてこのような立場からアプローチした研究は、これまでほとんど報告されていない。

本研究は、学習者である生徒の立場から、とくに運動部加入者に焦点を当ててその実態を明らかにするものである。運動部加入者は、選択制と部活動の両方を経験できる立場にあり、それらの微妙な差異にも敏感であると思われる。その意味でも、運動部加入者は選択制の特徴を解明するうえで格好の対象とみなすことができる。

以上の点をふまえて、本研究では、まず運動部加入者の選択制体育授業に対する意識(種目選択の理由、選択制から得られる効果、選択制に対するイメージなど)を明らかにする。とくに効果とイメージについては、運動部活動との比較を念頭に置きながら分析することにしたい。ついで、運動部加入者が選択制体育授業におい

てどのような経験をしているのかを明らかにし、部活動がもたらす諸経験との比較によって、選択制の特徴を描き出したい。以上2点を本研究の目的とする。

II 方法

1. 調査内容

(1) 選択制体育授業に対する意識

選択制における種目選択の理由については、「もともと興味があったから」をはじめとする11項目を設定し、該当するものすべてをあげてもらった。所属運動部との同一種目選択に対する意識については、「部活に役立つ新しい発見がある」などメリットに関する9項目を設定し、「5:とてもそう思う」から「1:まったくそう思わない」までの5点尺度によって測定した。選択制授業から得られる効果については、「運動が上達する楽しさ」など、主として楽しさ経験に基づく11項目を用意し、選択制と部活動のどちらでそうした効果が得られやすいかを尋ねた。選択制と部活動それぞれに対するイメージの測定にあたっては、SD法を採用した。具体的には、「A:快い感じ-B:不快な感じ」をはじめとする8つの形容詞対を両極に配置し、「5:Aである」、「4:どちらかといえばAである」、「3:どちらともいえない」、「2:どちらかといえばBである」、「1:Bである」の5点尺度を構成して、イメージがAとBのいずれにどの程度近いかが答えてもらった。

(2) 選択制体育授業における経験

選択制とは、生徒の個々人の能力や関心に見合った運動を選択させ、学習させることによって、一層大きな「意味のある経験(meaningful experience)」を獲得させようとするシステムである(高橋¹¹⁾)。このときには、いかなる経験が愛好的態度の形成に寄与するか(障害するか)が問われることになるだろう。本研究では、これを「よい経験」と「嫌な経験」という観点から捉えることにしたい。経験項目の作成にあたっては、櫻井⁹⁾の作成した運動部活動における

経験尺度に依拠した。ただしこの尺度は部活動を念頭に置いていることから、運動部活動特有の経験と思われるものについては表現を改めたり削除するなど若干の修正が施された。こうした手続きによって、最終的に「よい経験」、「嫌な経験」として、それぞれ36項目ずつを作成した。測定にあたっては、「3：よくあった」、「2：時にはあった」、「1：全くなかった」の3点尺度を採用した。

2. 調査対象とデータ収集の方法

本研究の調査対象は、I県の公立高等学校3校²⁾において、これまで選択制体育授業を受けたことがあり、かつ運動部に入部している（入部していた）生徒748名であった。調査は平成11（1999）年11月から同年12月にかけて質問紙法によって実施された。質問紙はすべて各学校の学級担任あるいは体育担当教員を通じて配布・回収され、669（男子369名、女子300名）の有効票（有効回答率：89.4%）を得た。

III 結果と考察

1. 運動部加入者の選択制体育授業に対する意識

(1) 種目選択理由

まず、選択制授業における種目の選択理由についてみていくことにしたい。表1は、種目選択の理由（複数回答）についての結果を示したものである。選択理由としてもっとも多くあげられたのは、「もともとその種目に興味があったから」（68.3%）で、これに「友達と一緒にしたかったから」（38.0%）、「楽そうだったから」（35.1%）、「もともと得意な種目だから」（29.9%）などが続いた。これに対して、「先輩に勧められて」（1.5%）、「種目を担当する先生がよかったから」（2.4%）、「オリエンテーションを聞いて魅力的だったから」（4.6%）、「種目が少なくやむを得ず」（6.6%）などの理由はごく少数にとどまった。種目への興味関心から選択する者の割合が最も高かったが、「楽そうだったから」、「ただなんとなく」といっ

表1 種目選択の理由（複数回数）

	n	%
もともとその種目に興味があったから	457	68.3
友達と一緒にしたかったから	254	38.0
楽そうだったから	235	35.1
もともと得意な種目だから	200	29.9
その種目が上手になりたかったから	152	22.7
ただ何となく	85	12.7
種目が少なくやむを得ず	44	6.6
オリエンテーションを聞いて魅力的だったから	31	4.6
種目を担当する先生がよかったから	16	2.4
先輩に勧められて	10	1.5
その他	32	4.8

注) 回答数の多い項目順

た回答も多いことから、消極的な選択をしている生徒もかなり存在することがわかる。嘉戸³⁾は、選択制体育の問題点として、生徒からの多様な希望への対処をあげているが、今回の調査では、「種目が少なくやむを得ず」が低い割合を示していることから、選択幅についての不満はそれほど多くないといえる。ところで、選択制においては、たんなる種目の嗜好・好嫌にもとづく選択ではなく、学習のねらいや学習内容・学習方法をも加味した適切な選択が求められる。そしてそのためには選択に必要とされる情報提供の場としてのオリエンテーションが重要な役割を果たすことになる。しかしながら、「オリエンテーションを聞いて魅力的だったから」は、4.6%ときわめて低率であり、このことから、オリエンテーションはほとんどその機能を果たしていないことが指摘される。

(2) 選択制体育授業と運動部活動の好嫌

ついで、選択制と部活動の好嫌についてみていくことにしたい。表2は、選択制と部活動のどちらが好きかについて尋ねた結果を示したものである。これをみると「両方とも同じくらい好き」（48.6%）が最も多く、次に「どちらかといえば運動部活動の方が好き」（32.1%）、「どちらかといえば選択制体育の方が好き」（18.7%）と続いた。このことから運動部加入者の約

表2 選択制体育授業と運動部活動の好嫌

	n	%
どちらかといえば 選択制体育授業の方が好き	125	18.7
両方とも同じくらい好き	325	48.6
どちらかといえば 運動部活動の方が好き	215	32.1
N.A.	4	0.6

半数は部活動と選択制の両方に好意的であることがわかる。また約3割の生徒は選択制よりも運動部活動の方に好意を示している。部活動への参加は、基本的に強制ではなく、生徒自身の自発的な意志によるものであることから、運動部活動に対して好意的であることは、いわば当然ともいえる。しかし、別の見方をすれば、2割近い生徒が運動部活動より選択制体育授業に好意を抱いているという点も無視できない。なぜ自発的な参加を基本としているはずの運動部活動より選択制体育の方が好きなのかについては、運動部活動そのものが抱える問題と選択制独自の魅力という2つの切り口から、より詳細な分析が必要になると考える。

(3) 選択制体育授業と運動部活動から得られる効果

続いて、選択制と部活動のそれぞれから得られる効果についてみていくことにする。表3は、その分析結果を示したものである。平均値が中間点(2.0)より高い項目、すなわち選択制の方により効果があるとされた項目は、「いろいろな人と運動する楽しさ」、「精神的にリラックスできる楽しさ」、「自由に運動やスポーツができる楽しさ」の3項目であった。これらの自由な活動に伴う楽しさは、部活動よりもむしろ選択制で味わうことのできるものであると認識されているようである。一方、その他の9項目は、いずれも部活動において味わうことのできる楽しさであると認識されているようである。

とくに、「忍耐力や責任感」、「体力の向上」、「運動技能が上達する楽しさ」といった心理的・身体的な成果に関わる3項目は、いずれも「運動部活動の方が得られる」という回答が7割を超えており、部活動独自の効果と認識される割合が高いことが示された。これらのことから、選択制と部活動にはそれぞれ特徴的な効果があるといえるだろう。

(4) 選択制体育授業と運動部活動におけるイメージの比較

ここでは、選択制と部活動に対して抱いているイメージについて検討する。その分析結果は、表4に示すとおりである。この表からわかるように、選択制はすべての項目で平均値が中間点(3.0)を上回っており、総じてよいイメージをもたれていることがわかる。なかでも、スポーツをすることによって得られる「解放的な感じ」や「快い感じ」、スポーツ活動実施後の「満足感」などのイメージが高く評価されている点は特徴的といえる。部活動のイメージについても、選択制のイメージと同様、平均値はすべて中間点を上回っていた。部活動についても選択制と同じく、総じてよいイメージがもたれているようである。とりわけ運動部の集団性に由来する「連帯感」、スポーツ活動そのものから得られる「快い感じ」、何かをやり遂げることによって得られる「達成感」、スポーツ活動に対する「満足感」などのイメージが高く評価されている。

表3 選択制体育授業と部活動から得られる効果

	選択制体育授業の方が得られる		どちらともいえない		運動部活動の方が得られる		N.A.		平均値
	n	%	n	%	n	%	n	%	
(1) 運動技能が上達する楽しさ	76	11.4	101	15.1	483	72.2	9	1.3	1.38
(2) 思い切りからだを動かす楽しさ	223	33.3	188	27.8	252	37.7	8	1.2	1.96
(3) 仲間と協力して運動する楽しさ	177	26.5	236	35.3	248	37.1	8	1.2	1.89
(4) 自分(たち)でいろいろ考える楽しさ	148	22.1	218	32.6	295	44.1	8	1.2	1.78
(5) 周りの人からほめられたり、励まされたりする楽しさ	105	15.7	266	39.8	288	43.0	10	1.5	1.72
(6) 精神的にリラックスできる楽しさ	389	58.1	142	21.2	130	19.4	8	1.2	2.39
(7) いろいろな人と運動する楽しさ	388	58.0	175	26.2	98	14.6	8	1.2	2.44
(8) 先生から教えられたり、声をかけてもらう楽しさ	121	18.1	308	46.0	231	34.5	9	1.3	1.83
(9) 自由に運動やスポーツができる楽しさ	347	51.9	200	29.9	113	16.9	9	1.3	2.35
(10) 人より上手にできる楽しさ	149	22.3	313	46.8	196	29.3	11	1.6	1.93
(11) 試合や競争に勝つ楽しさ	62	9.3	169	25.3	429	64.1	9	1.3	1.44
(12) 忍耐力や責任感	35	5.2	113	16.9	513	76.7	8	1.2	1.28
(13) 体力の向上	60	9.0	83	12.4	518	77.4	8	1.2	1.31

注) 平均値は、「選択制体育授業の方が得られる(3点)」、「どちらともいえない(2点)」、「運動部活動の方が得られる(1点)」として算出

表4 選択制体育授業と運動部活動のイメージ比較

イメージ		Mean	SD	t-value
(1) 快い感じ	選択制 (n=652)	4.16	0.79	1.13 *
	部活動	4.11	0.92	
(2) 解放的な感じ	選択制 (n=657)	4.20	0.85	11.72 ***
	部活動	3.69	1.16	
(3) 満足感	選択制 (n=658)	4.05	0.87	0.96
	部活動	4.03	1.02	
(4) 優越感	選択制 (n=657)	3.32	0.81	-1.42 *
	部活動	3.38	1.02	
(5) 勝利感	選択制 (n=659)	3.52	0.88	-3.50 ***
	部活動	3.68	1.11	
(6) 達成感	選択制 (n=659)	3.68	0.93	-8.63 ***
	部活動	4.08	1.07	
(7) 連帯感	選択制 (n=658)	3.90	0.92	-5.67 ***
	部活動	4.16	1.03	
(8) 自主的な感じ	選択制 (n=660)	3.82	0.99	1.13 *
	部活動	3.77	1.13	

注) *: p<.05, **: p<.01, ***: p<.001

ついで、選択制と部活動のイメージの差異についてみていくことにしたい。先の表からもわかるように、「満足感」を除くすべての項目で有意な差がみられた。このうち「快い感じ」、「解放的な感じ」、「自主的な感じ」の3項目については、選択制が部活動よりも高い値を示した。とくに、「解放的な感じ」で最も大きな差がみられたことから、解放感は選択制に特徴的なイメージであるとみることができる。これは逆にいえば、部活動は選択制よりも「拘束されている感じ」というイメージがあるということになる。一方、部活動の方が選択制よりも高い平均値を示した項目は「優越感」、「勝利感」、「達成感」、「連帯感」の4項目であった。とくに、「達成感」の項目において大きな差がみられたことから、これは部活動に特徴的なイメージであるといえるだろう。以上の結果から両者を比較すると、選択制は「解放感」、「快い感じ」など精神的にリラックスしたイメージ、部活動は「達成感」、「勝利感」、「連帯感」など、何かを成し遂げる場であるというイメージがそれぞれ特徴的といえる。

2. 運動部加入者の選択制体育授業における経験

(1) 「よい経験」の因子分析

ここでは、運動部加入者の選択制における経験の内容を因子分析の手法を用いて明らかにする。最初に「よい経験」について検討する。まず「よい経験」に関する36変量から作成された相関行列に因子分析法(主因子法)を適用し、

固有値の変動状況および因子の解釈可能性から6因子(累積寄与率:54.0%)を抽出した。ついでバリマックス回転後の因子負荷行列にお

表5 よい経験の因子分析

第1因子 <社会的承認> (寄与率:29.1%)	
15) 試合(ゲーム)で活躍した	.695
5) 自分の力を他人が認めてくれた	.694
16) まわりの人が自分の実力を正当に評価してくれた	.661
4) 自分の活躍が勝利につながった	.652
10) 自分プレーをほめてもらった	.628
14) 満足できる試合(ゲーム)ができた	.601
3) 試合で勝つてうれしい思いをした	.466
第2因子 <教授行動> (寄与率:7.2%)	
35) よい見本としてみんなの前で試技をした	.664
34) 異性や他の人から注目された	.639
18) 技術について友達に教えた	.569
28) 審判法やルールを友達に教えた	.524
第3因子 <技術・技能の探求> (寄与率:6.7%)	
2) 自分のフォームや技術を分析した	.732
6) 自分なりの目標や課題をもって練習した	.679
8) 知りたいことについて適切なアドバイスしてもらえた	.604
1) 技術が上達した	.441
9) 難しい目標や記録に挑戦した	.414
13) 常に頭を使いながら練習した	.412
第4因子 <意思決定への参画> (寄与率:4.6%)	
21) 練習内容を決める話し合いに参加した	.745
11) 練習計画を立てる話し合いに参加した	.673
24) 活動目標を決める話し合いに参加した	.653
22) 自分の意見が練習や試合に反映された	.507
第5因子 <緊張感と協力> (寄与率:3.3%)	
27) 勝利や成功・失敗にハラハラ・ドキドキした	.604
23) 励まし合いながら活動した	.523
19) みんなと協力して活動した	.521
29) 自分なりに反省した	.518
33) 試合(ゲーム)前は緊張した	.465
第6因子 <達成> (寄与率:3.3%)	
25) 実力以上のものが発揮できた	.559
32) できなかったことができるようになった	.529
31) 今まで気づけなかった自分の能力に気づいた	.489
26) 練習したことが発揮できた	.445

(累積寄与率:54.0%)

る因子負荷量が0.40以上の項目をもとに各因子の解釈および命名を行った(表5)。

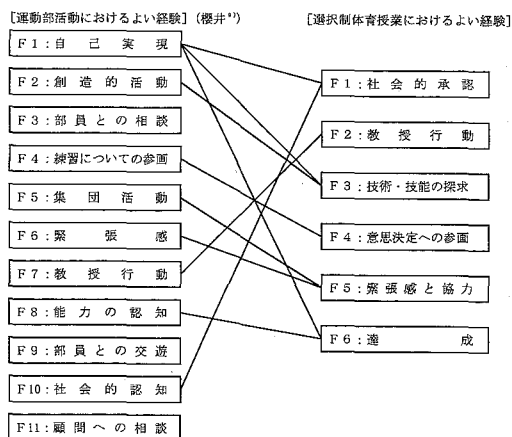
第1因子(F1)に高い因子負荷量を示した項目は、「試合(ゲーム)で活躍した」、「自分の力を他人が認めてくれた」、「まわりの人が自分の力を正当に評価してくれた」、「自分の活躍が勝利につながった」などを含む7項目であった。この因子は自分の存在や活躍を他人が認めてくれた経験内容の項目に高い負荷量を示していることから、「社会的承認」因子と命名した。第2因子(F2)に高い因子負荷量を示した項目は、「よい見本としてみんなの前で試技をした」、「異性や他の人から注目された」、「技術について友達に教えた」、「審判法やルールを友達に教えた」の4項目であった。この因子は他の人に何かを教えるような内容の項目

に高い負荷量を示していることから、「教授行動」因子と命名した。第3因子(F3)に高い因子負荷量を示した項目は、「自分のフォームや技術を分析した」、「自分なりの目標や課題をもって練習した」、「知りたいことについて適切なアドバイスをしてもらえた」、「技術が上達した」などを含む6項目であった。この因子は技術の向上や練習への積極的な取り組みといった内容の項目に高い負荷量を示していることから、「技術・技能の探求」因子と命名した。第4因子(F4)に高い因子負荷量を示した項目は、「練習内容を決める話し合いに参加した」、「練習計画を立てる話し合いに参加した」、「活動目標を決める話し合いに参加した」、「自分の意見が練習や試合に反映された」の4項目であった。この因子は練習や試合に関する話し合い(意思決定)に参画するといった内容の項目に高い負荷量を示していることから、「意思決定への参画」因子と命名した。第5因子(F5)に高い因子負荷量を示した項目は、「勝利や成功・失敗にハラハラ・ドキドキした」、「励まし合いながら活動した」、「みんなと協力して活動した」、「自分なりに反省した」などを含む5項目であった。この因子は緊張感やスリル感、また仲間同士の励ましや仲間との協力といった内容の項目に高い負荷量を示していること

から、「緊張感と協力」因子と命名した。第6因子(F6)に高い因子負荷量を示した項目は、「自分の実力以上のものが発揮できた」、「できなかったことができるようになった」、「今まで気づかなかった自分の能力に気づいた」、「練習したことが発揮できた」の4項目であった。この因子は何かを成し遂げた内容の項目に高い負荷量を示していることから、「達成」因子と命名した。

以上の結果を、図1のように櫻井⁹⁾の運動部活動における「よい経験」因子の内容と照合すると、本研究において発見された「社会的承認(F1)」は櫻井の研究における「社会的認知」と「自己実現」に対応しており、以下同様に「教授行動(F2)」はそのまま「教授行動」に、「技術・技能の向上(F3)」は「自己実現」と「創造的活動」に、「意思決定への参画(F4)」は「練習についての参画」に、「緊張感と協力(F5)」は「緊張感」と「集団活動」に、そして「達成(F6)」は「自己実現」と「能力認知」にそれぞれ対応していることがわかる。これらからわかることは、まず部活動における「部員との(部活以外の)相談(F3)」や「顧問への相談(F11)」といった部活動独自の因子を除けば、選択制における「よい経験」は、部活動の因子がいくつか統合された、もしくはそのまま対応しているということである。これは、選択制で提供される経験そのものは、内容的に部活動と共通する点がかなりあるということの意味している。長谷川¹¹⁾は、選択制体育授業における生徒の学習成果に関する評価因子として、「運動文化の学習」、「社会的行動の学習」、「生涯スポーツへの志向」、「自主的学習能力の伸長」という4つの因子を抽出し、前二者の評価が高いことを報告しているが、この結果をふまえて選択制における「よい経験」を見直してみると、いずれの経験因子も、運動文化の享受あるいは社会的関係をめぐる経験に関係していることがわかる。これは、一般にいわれるように、経験と評価が深く結びついてい

図1 よい経験の対応関係



ることを示すものといえよう。ところで、櫻井⁹⁾は、「教授行動」を部活動に特有のものとする見解を示しているが、かかる因子が選択制においても発見されたことは非常に興味深い結果といえるだろう。これは、選択制においては運動部加入者が「教える立場」に立るとということと同時に、それが「よい経験」として認識されていることを意味している。

(2) 「嫌な経験」の因子分析

引き続き選択制における「嫌な経験」についてみていくことにしたい。「よい経験」と同様の手続きにより因子の抽出を試みたところ、「嫌な経験」の因子として4因子(累積寄与率：

表6 嫌な経験の因子分析

第1因子 <活動からの排除> (寄与率：32.9%)	
22) 練習に参加させてもらえなかった	.759
25) 練習内容を決める話し合いに参加させてもらえなかった	.747
14) みんなから軽蔑された	.737
11) 活動目標を決める話し合いに参加させてもらえなかった	.717
8) みんなから無視された	.716
27) 悪い見本としてみんなの前で試技をした	.695
30) 練習計画を立てる話し合いに参加させてもらえなかった	.692
34) アドバイスが不公平だった	.673
23) 殴られたり蹴られたりした	.669
6) 審判法やルールを教えたが聞き入れてもらえなかった	.647
19) 技術を教えたが聞き入れてもらえなかった	.642
33) 自分で考えた練習をさせてもらえなかった	.638
35) 納得できない練習をやらされた	.588
10) 自分には無関係のことで怒られた	.582
32) まわりの人が自分の力を正当に評価してくれなかった	.529
7) 知りたいことについて適切なアドバイスをもらえなかった	.497
26) 誰にも頼りにされなかった	.489
24) 意見が対立していたので自分とは違う意見に合わせた	.466
4) 誰にも励ましてもらえなかった	.420
第2因子 <試合場面における不満> (寄与率：9.4%)	
31) 試合(ゲーム)で負けて悔しい思いをした	.665
16) 自分のミスが負けにつながった	.662
28) 練習したことを試合(ゲーム)で発揮できなかった	.623
15) 満足できる試合(ゲーム)ができなかった	.598
13) がんばっても試合(ゲーム)で勝てなかった	.570
17) 試合(ゲーム)の前は緊張した	.539
3) 勝負や成功・失敗にハラハラ・ドキドキした	.518
1) 試合(ゲーム)でよい結果を出すことができなかった	.509
第3因子 <非承認・叱責> (寄与率：4.7%)	
21) 自分力を他人が認めてくれなかった	.591
20) 自分のプレーを非難された	.541
2) 試合(ゲーム)でミスをして責められた	.426
第4因子 <目標不保持> (寄与率：3.6%)	
12) 自分なりの考え方をもちずに練習した	.734
5) 自分なりの考え方や目標をもたずに練習した	.648
(累積寄与率：50.7%)	

50.7%)を抽出した。回転後の因子負荷量をもとに解釈された因子は次の通りである(表6)。

第1因子(F1)に高い因子負荷量を示した項目は「練習に参加させてもらえなかった」、「みんなから軽蔑された」、「活動目標を決め

る話し合いに参加させてもらえなかった」、「みんなから無視された」などを含む19項目であった。この因子は体育の学習活動に参加させてもらえず疎外されるという内容の項目に高い負荷量を示していることから、「活動からの排除」因子と命名した。第2因子(F2)に高い因子負荷量を示した項目は「試合(ゲーム)で負けて悔しい思いをした」、「自分のミスが負けにつながった」、「練習したことを試合(ゲーム)で発揮できなかった」、「満足できる試合(ゲーム)ができなかった」などを含む8項目であった。この因子は試合において満足のいく結果が出せなかったという内容の項目に高い負荷量を示していることから、「試合場面における不満」因子と命名した。第3因子(F3)に高い因子負荷量を示した項目は「自分の力を他人が認めてくれなかった」、「自分のプレーを非難された」、「試合(ゲーム)でミスをして責められた」の3項目であった。この因子は自分の能力を他人が認めてくれないという内容の項目に高い負荷量を示していることから、「非承認・叱責」因子と命名した。第4因子(F4)に高い因子負荷量を示した項目は「自分なりの考えをもたずに練習した」、「自分なりの課題や目標をもたずに練習した」の2項目であった。この因子は練習に対する目的や課題意識の欠如といった内容の項目に高い負荷量を示していることから、「目標不保持」因子と命名した。

以上の結果を、「よい経験」と同じく図2のように櫻井⁹⁾の運動部活動における「嫌な経験」因子の内容と照合したところ、本研究において発見された「活動からの排除(F1)」は櫻井の研究における「活動への不参加」、「部員からの直接非難」、「教授不機能」などに、同じく「試合場面における不満(F2)」は「非自己実現」と「緊張感」に、「非承認・叱責(F3)」は「部員からの直接非難」と「社会的非承認」に、そして「目標不保持(F4)」はそのまま「目標不保持」にそれぞれ対応していることがわかる。また、選択制における「嫌な経

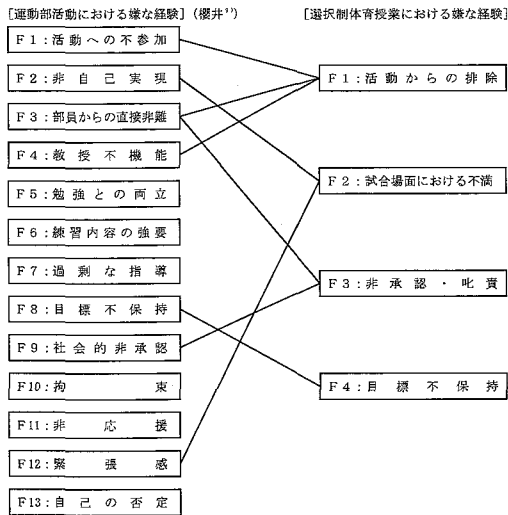


図2 嫌な経験の対応関係

験」もまた、部活動で発見された因子がいくつか統合された、もしくはそのまま対応するものであった。ただし、部活動における「嫌な経験」には、「勉強との両立」、「過剰な指導」、「拘束」など独自の因子がかなりみられるということにも留意しなければならない。選択制における「嫌な経験」の構造は、運動部の経験に比べるとかなり単純なものといえるだろう。

(3) 選択制体育授業における経験の特徴

ここでは、上述の因子分析の結果もふまえながら、選択制における「よい経験」と「嫌な経験」の特徴について検討する。表7は選択制体育授業における「よい経験」として抽出された因子ごとに、負荷量の高い項目の度数および平均値を示したものである。まず、「よい経験」の平均値を概観すると、「社会的承認」、「緊張感と協力」の2因子については、多くの運動部加入者が選択制において経験していることがわかる。一方、「教授行動」、「技術・技能の探求」、「意思決定への参画」、「達成」については、あまり経験していないという傾向がみられる。「社会的承認」を構成する項目は、相対的に平均値が高く、度数でも「よくあった」と「時にはあった」の合計の割合が8割を超える

項目がいくつもみられた。一方、「教授行動」、「意思決定への参画」を構成する項目の平均値は、相対的に低く、度数も「まったくなかった」とする割合が高かった。このことから、現在の選択制では、運動部加入者の多くが「社会的承認」を経験している一方で、「教授行動」や「意思決定への参画」を経験する者は、それほど多くない傾向をみる事ができる。このうち、とくに「意思決定への参画」が「まったくなかった」とする者が多いという結果は、選択制の趣旨に照らした場合、看過することのできない問題であるといわねばならない。選択制では、運動(種目)の選択のみならず、学習過程において生起する問題を解決するために、内容や活動の仕方を工夫したり、選択したりしながら学習することもまた大切である。しかし今回の結果をみるかぎり、そのような学習活動は現実の選択制ではあまり定着していないように思われる。

次に「嫌な経験」についてみていくことにしたい。表8は選択制における「嫌な経験」として抽出された因子ごとに負荷量の高い項目の度数および平均値を示したものである。これを見ると、全般に「嫌な経験」はそれほどしていない傾向にあることがうかがえる。最も平均値の低い因子は「活動からの排除」であったが、これと先の「意思決定への参画」にみられた傾向とを考え併せると、この因子について「まったくなかった」とする回答が突出して多いのは、生徒による自主的な活動の場そのものが設けられていないためではないかと推察される。また平均値こそ低いものの、「試合(ゲーム場面)での不満」は、他の因子や項目に比べて「よくあった」と「時にはあった」の割合が高かった。これは、運動部加入者の場合、非加入者よりもゲーム・パフォーマンスに対する要求水準が高く、選択制で行われるゲームに不満を抱くためではないかと推察される。

最後に櫻井⁹⁾の分析結果に照らしながら、選択制と部活動との経験の違いについてみていくことにしたい。ただし、櫻井の因子分析結果と

表7 選択制体育授業におけるよい経験の実態

	よくあった		時にはあった		全くなかった		N.A.		選択制 平均値	部活動 平均値
	n	%	n	%	n	%	n	%		
第1因子 <社会的承認>										
15) 試合(ゲーム)で活躍した	140	20.9	434	64.9	91	13.6	4	0.6	2.07	1.90
5) 自分の力を他人が認めてくれた	140	20.9	429	64.1	99	14.8	1	0.1	2.06	2.04
16) まわりの人が自分の実力を正當に評価してくれた	123	18.4	422	63.1	119	17.8	5	0.7	2.01	—
4) 自分の活躍が勝利につながった	137	20.5	414	61.9	114	17.0	4	0.6	2.04	1.82
10) 自分プレーをほめてもらった	140	20.9	417	62.3	109	16.3	3	0.4	2.05	2.07
14) 満足できる試合(ゲーム)ができた	209	31.2	397	59.3	60	9.0	3	0.4	2.22	2.03
3) 試合で勝つてうれいしい思いをした	347	51.9	268	40.1	50	7.5	4	0.6	2.45	2.21
第2因子 <教授行動>										
35) よい見本してみんなの前で試技をした	65	9.7	183	27.4	416	62.2	5	0.7	1.47	1.62
34) 異性や他の人から注目された	50	7.5	207	30.9	408	61.0	4	0.6	1.46	1.55
18) 技術について友達に教えた	111	16.6	309	46.2	245	36.6	4	0.6	1.80	1.88
28) 審判法やルールを友達に教えた	103	15.4	292	43.6	270	40.4	4	0.6	1.75	—
第3因子 <技術・技能の探求>										
2) 自分のフォームや技術を分析した	106	15.7	317	47.4	245	38.6	2	0.3	1.79	—
6) 自分なりの目標や課題をもって練習した	149	22.3	332	49.6	185	27.7	3	0.4	1.95	2.15
8) 知りたいことについて適切なアドバイスをしてもらった	84	12.6	329	49.2	252	37.7	4	0.6	1.75	—
1) 技術が上達した	192	28.7	392	58.6	82	12.3	3	0.4	2.17	2.34
9) 難しい目標や記録に挑戦した	86	12.9	291	43.5	289	43.2	3	0.4	1.70	1.77
13) 常に頭を使いながら練習した	94	14.1	360	53.8	208	31.1	7	1.0	1.83	1.89
第4因子 <意思決定への参画>										
21) 練習内容を決める話し合いに参加した	101	15.1	287	42.9	276	41.3	5	0.7	1.74	1.70
11) 練習計画を立てる話し合いに参加した	94	14.1	284	42.5	286	42.8	5	0.7	1.71	1.72
24) 活動目標を決める話し合いに参加した	85	12.7	271	40.5	308	46.0	5	0.7	1.66	1.72
22) 自分の意見が練習や試合に反映された	72	10.8	301	45.0	290	43.3	6	0.9	1.67	—
第5因子 <緊張感と協力>										
27) 勝利や成功・失敗にハラハラ・ドキドキした	319	47.7	242	36.2	105	15.7	3	0.4	2.32	2.55
23) 励まし合いながら活動した	216	32.1	345	51.6	104	15.5	5	0.7	2.17	2.19
19) みんなと協力して活動した	327	48.9	294	43.9	43	6.4	5	0.7	2.43	2.33
29) 自分なりに反省した	192	28.7	349	52.2	124	18.5	4	0.6	2.10	2.32
33) 試合(ゲーム)前は緊張した	139	20.8	225	33.6	300	44.8	5	0.7	1.78	2.58
第6因子 <達成>										
25) 実力以上のものが発揮できた	90	13.5	380	56.8	195	29.1	4	0.6	1.84	1.85
32) できなかったことができるようになった	151	22.6	372	55.6	143	21.4	3	0.4	2.01	2.19
31) 今まで気づけなかった自分の能力に気づいた	86	12.9	256	38.3	323	48.3	4	0.6	1.64	1.63
26) 練習したことが発揮できた	136	20.3	403	60.2	124	18.5	6	0.9	2.02	2.09

注) 部活動平均値は、榎井⁹⁾による
平均値は「よくあった(3点)」、「時にはあった(2点)」、「全くなかった(1点)」として算出

表8 選択制体育授業における嫌な経験の実態

	よくあった		時にはあった		全くなかった		N.A.		選択制 平均値	部活動 平均値
	n	%	n	%	n	%	n	%		
第1因子 <活動からの排除>										
22) 練習に参加させてもらえなかった	20	3.0	71	10.8	572	85.5	6	0.9	1.17	1.15
25) 練習内容を決める話し合いに参加させてもらえなかった	23	3.4	71	10.6	568	84.9	7	1.0	1.18	1.16
14) みんなから軽蔑された	26	3.9	80	12.0	555	83.0	8	1.2	1.20	1.26
11) 活動目標を決める話し合いに参加させてもらえなかった	19	2.8	84	12.8	560	83.7	6	0.9	1.18	1.18
8) みんなから無視された	17	2.5	76	11.4	569	85.1	7	1.0	1.17	1.25
27) 悪い見本としてみんなの前で試技をした	25	3.7	70	10.5	566	84.6	8	1.2	1.18	—
30) 練習計画を立てる話し合いに参加させてもらえなかった	23	3.4	82	12.3	556	83.1	8	1.2	1.19	1.16
34) アドバイスが不公平だった	28	4.2	101	15.1	533	79.7	7	1.0	1.24	—
23) 殴られたり蹴られたりした	21	3.1	58	8.7	582	87.0	8	1.2	1.15	1.24
6) 審判法やルールを教えたが聞き入れてもらえなかった	31	4.6	109	16.3	520	77.9	9	1.3	1.26	1.23
19) 技術を教えたが聞き入れてもらえなかった	21	3.1	110	16.4	531	79.4	7	1.0	1.23	1.24
33) 自分で考えた練習をさせてもらえなかった	21	3.1	102	15.2	538	80.4	8	1.2	1.22	1.28
35) 納得できない練習をやらされた	32	4.8	140	20.9	488	72.9	9	1.3	1.31	1.57
10) 自分には無関係のことで怒られた	21	3.1	104	15.5	538	80.4	6	0.9	1.22	—
32) まわりの人が自分の力を正當に評価してくれなかった	21	3.1	147	22.0	494	73.8	7	1.0	1.29	1.38
7) 知りたいことについて適切なアドバイスしてもらえなかった	41	6.1	165	24.7	454	67.9	9	1.3	1.37	1.41
26) 誰にも頼りにされなかった	38	5.7	152	22.7	471	70.4	8	1.2	1.34	1.32
24) 意見が対立していたので自分とは違う意見に合わせた	29	4.3	197	29.4	436	65.2	7	1.0	1.39	—
4) 誰にも励ましてもらえなかった	49	7.3	176	26.3	437	65.3	7	1.0	1.41	—
第2因子 <試合場面における不満>										
31) 試合(ゲーム)で負けて悔しい思いをした	148	22.1	350	52.3	163	24.4	8	1.2	1.98	2.39
16) 自分のミスが負けにつながった	77	11.5	408	61.0	176	26.3	8	1.2	1.85	1.86
28) 練習したことを試合(ゲーム)で発揮できなかった	64	9.6	361	54.0	235	35.1	9	1.3	1.74	1.99
15) 満足できる試合(ゲーム)ができなかった	92	13.8	392	58.6	176	26.3	9	1.3	1.87	2.13
13) がんばっても試合(ゲーム)で勝てなかった	102	15.2	396	59.2	164	24.5	7	1.0	1.91	2.68
17) 試合(ゲーム)の前は緊張した	105	15.7	219	32.7	336	50.2	9	1.3	1.65	2.50
3) 勝負や成功・失敗にハラハラ・ドキドキした	241	36.0	286	42.8	132	19.7	10	1.5	2.17	2.48
1) 試合(ゲーム)でよい結果を出すことができなかった	151	22.6	435	65.0	71	10.6	12	1.8	2.12	2.29
第3因子 <非承認・叱責>										
21) 自分力を他人が認めてくれなかった	34	5.1	163	24.4	483	69.2	9	1.3	1.35	1.42
20) 自分のプレーを非難された	33	4.9	168	25.1	461	68.9	7	1.0	1.35	1.52
2) 試合(ゲーム)でミスをして責められた	47	7.0	206	30.8	407	60.8	9	1.3	1.45	—
第4因子 <目標不保持>										
12) 自分なりの考え方をもちずに練習した	73	10.9	275	41.1	315	47.1	6	0.9	1.64	1.73
5) 自分なりの考え方や目標をもちずに練習した	119	17.8	327	48.9	214	32.0	9	1.3	1.86	1.82

注) 部活動平均値は、榎井⁹⁾による
平均値は「よくあった(3点)」、「時にはあった(2点)」、「全くなかった(1点)」として算出

本研究の結果では、因子の数や内容が異なっており、因子レベルの直接的な比較は困難と判断されることから、両者に共通する項目に着目して検討を加えることにしたい。

まず「よい経験」であるが、選択制における経験の平均値の方が高かったのは、「自分の活躍が勝利につながった」、「満足できる試合(ゲーム)ができた」といった「社会的承認」にかかわる項目であった。これに対し、部活動の方が高い平均値を示したのは、「自分なりの目標や課題をもって練習した」、「技術が上達した」など技術の探求に関する項目、そして「勝利や成功・失敗にドキドキ・ハラハラした」、「試合(ゲーム)前は緊張した」などよい意味での緊張感に関する項目であった。このことから、選択制は運動部加入者にとれば、部活動よりも試合場面で活躍し、他人に認められることによる楽しさを経験するが、逆に技能の探求や緊張感に伴う楽しさの経験は少ないということが推察される。

一方、「嫌な経験」において、選択制体育授業の平均値がきわだって高い項目はみられなかった。運動部活動の平均値の方が高かったのは、「試合(ゲーム)場面での不満」因子を構成する項目、そして「納得できない練習をさせられた」、「自分のプレーを非難された」などの項目であった。これらは、一般に競技性が強く勝利志向的な部活動において生じやすい内容といっていよう。選択制は部活動に比べて全般に「嫌な経験」は少ないのではないかと思われる。

IV まとめ

今後の選択制体育授業のあり方を考えるためには、選択制とそれ以外のスポーツ活動との関連に目を向けねばならない。本研究の目的は、高等学校における運動部加入者を対象として、選択制に対する意識と経験の実態を明らかにすることであった。主な結果は以下のように要約される。

1. 選択制の種目選択は種目自体への興味関心による場合が多いが、単に気軽さ・気楽さを求める消極的な選択もかなりみられる。また、運動部加入者の約半数は部活動と選択制の両方に好意的であり、2割近い生徒は、自発的に参加したはずの部活動よりも選択制に好意を抱いている。さらに、選択制と部活動のそれぞれから得られる効果についてみると、選択制では自由な活動に伴う心理的・社会的な効果が、もう一方の部活動では厳しさに伴う心理的・身体的な効果が得られるとする傾向がみられた。このように、選択制と部活動にはそれぞれ特徴的な効果がある。選択制と部活動のイメージについては、両方とも総じて好意的な捉え方がなされているが、両者を比較すると、選択制は「解放感」、「快い感じ」など精神的にリラックスしたイメージ、部活動は「達成感」、「勝利感」、「連帯感」など、何かを成し遂げる場であるというイメージが強い。
2. 選択制における経験内容を因子分析によって検討したところ、「よい経験」については、「社会的承認」、「教授行動」、「技術・技能の探求」、「意思決定への参画」、「達成」の6因子が抽出された。これら「よい経験」因子は、内容的に部活動と共通するものが多く、またいずれも運動文化の享受あるいは社会的関係をめぐる経験に関係している。さらに、運動部加入者は、選択制授業における活躍によって社会的に承認されることによる楽しさを経験することが多いが、技能の探求や意思決定への参画といった学習経験は少ない。一方、「嫌な経験」については、「活動からの排除」、「試合場面における不満」、「非承認・叱責」、「目標不保持」の4因子が抽出された。これら「嫌な経験」因子もほとんど部活動と共通している。さらに、「嫌な経験」では、選択制の平均値がきわだって高い項目はみられず、部活動に比べると全般的に「嫌な経験」は少ない。

本研究の結果からは、運動部との比較において浮き彫りにされる選択制独自の経験を見いだすことはできなかった。しかし、そうした経験の「現れ方」にはそれぞれの特徴が表れているように思われる。例えば、意識分析の結果によると、選択制では自由な活動に伴う心理的・社会的な効果が、一方の部活動では厳しさに伴う心理的・身体的な効果があるとされたが、このことから、運動部加入者は場面によってスポーツへの取り組み方（期待する効果）を使い分けられていることが推察される。つまり、部活動では十分に味わえなかった社会的承認による楽しさを経験し、部活動では技能の探求や緊張感を経験するというように、それぞれを補完的に利用しているのではないかということである。

一見すると、この結果は選択制が十分にその役割を果たしていることを裏づけるもののようにも映るが、必ずしもそうとはいえない。例えば、「楽そうだったから」、「ただなんとなく」といった理由で種目を選択する生徒がかなりみられることや「解放的な感じ」というイメージがかなり強いこと、あるいは社会的承認を得る場としての意味合いが強いといった諸結果は、選択制授業が生徒の即時的な欲求を満たすだけの授業、あるいは息抜きの授業になっていることを示すものともいえるだろう。われわれは、今後の選択制のあり方について論じる前に、本来めざされているような選択制授業がほとんど定着していない現状にしっかりと目を向ける必要があるのではなからうか。とくに、生徒の選択にとって重要な意味をもつオリエンテーションがほとんど機能していないといった、学校あるいは教師側の条件に関する問題点を丁寧に掘り下げていく努力を怠ってはならないと考える。当面は、本研究で提示されたような経験内容と、選択制の類型（範囲・数・学習方法）、あるいは種目との関係性について、より詳細な分析を行うことが課題とされる。本研究は、運動部加入者の選択制に対する全般的な意識傾向と経験

内容の把握をねらいとしたため、対象校における選択制の実態についてはまったく言及していないが、選択制の運営方法に対する実践的な示唆や提言を行うためには、学校ごとに異なる選択制の態様、実施条件等をふまえた研究成果の蓄積が欠かせない。これらの諸点について、今後さらなる研究の深化が望まれる。

謝 辞

本研究の実施にあたり、多大なご協力をいただいた平成11年度金沢大学教育学部卒業生、駒口正志君に心から感謝の意を表します。

注

対象校は、地域性（所在地）および選択制体育に対する取り組み方（年間計画、選択種目、評価方法等）の観点から、できるだけ偏りがないうよう配慮したうえで決定した。

文 献

- 1) 長谷川悦示 (1999) 選択制授業の現状と課題. 学校体育 52(3) : 28-33.
- 2) 畑 攻・山本俊彦 (1985) スポーツ活動に対する態度パターンによるマーケット・セグメンテーション的研究：中学校3年生の選択制授業における分析と考察. 体育経営学研究 2 : 23-32.
- 3) 嘉戸 脩 (1990) 選択制体育の具現化は学校体育の正念場. 体育科教育 38(5) : 9.
- 4) 松田雅彦ほか (1992) 体育科における選択制システムの理念とその方向に関する研究. 大阪教育大学紀要第V部門 40(2) : 361-375.
- 5) 松永淳一 (1995) 高等学校における選択制体育授業に関する研究. 長崎大学教育学部教科教育学研究報告 25 : 55-62.
- 6) 永田秀隆 (1997) 中学・高等学校における選択制非実施校の実態に関する研究. 仙台大学紀要28(2) : 77-83.

- 7) 岡出美則 (1994) 選択制授業との対話. 体育科教育 42(4) : 30-32.
- 8) 齋藤芳枝ほか (1997) 学習者の状況から見た選択制授業の可能性に関する研究. 日本女子体育大学紀要 27 : 45-52.
- 9) 櫻井貴志 (1997) スポーツ経験が運動者行動に及ぼす影響: 運動部活経験と接近・逃避行動. 平成9年度金沢大学大学院教育学研究科修士論文.
- 10) 高橋健夫 (1994) 明確な理論と方法を提示するとき. 体育科教育 42(4) : 9.
- 11) 高橋健夫 (1995) 選択制授業いま何が問題か. 体育科教育 43(10) : 10-12.
- 12) 常木己喜雄 (1995) 選択制授業の考え方・進め方. 宇土正彦監 学校体育授業事典. 大修館書店, pp. 597-600.
- 13) 宇土正彦ほか (1991) 高校体育科教育における選択制と運動施設に関する研究. 筑波大学体育科学系紀要 4 : 19-28.
- 14) 山下秋二ほか (1999) 選択制体育の運営方法: 運動満足の内容からみた生徒の類型. 京都教育大学教育実践研究年報 15 : 129-146.